



【現代語訳】

長唄 菖蒲浴衣

安政六年(1829)五月 作曲 不明

作曲 二代目 杵屋勝三郎 三代目 杵屋正次郎

普段は軒先に端午節句の兜飾りの下につけていた武者の小人形も、

こんな梅雨の時期じゃ、外して傘の下につるしてやんの、てな

芭蕉門人、宝井其角の俳句があるよね。その其角の俳号、普子さんが

詠んだ句の、まさに雨の季節となったね。

お前さんも襲名披露で替わってしまった新しい芸名を、

市中の色々な人達に売り広めないといけないが、

未だまだ拙い芸だから身に重いことだと思つて、慢心してはいけないよ。

祈れば直ぐに叶うという不思議な雨乞いの「皐月の鏡」に、あの飾り兜の

面影を映したとしても、鏡には雨の気配となる曇りさえないだろう？

新人の若芽と言われるうちは、榊木という樹の若葉をそつと鏡の裏に

秘めて魔除けとするように、謙虚を以つて身を護りなさい。

今日の晴れ舞台の着物は、風薫る五月の菖蒲ゆかたの白生地がさねの襲かさねだね。

でも襲かさねだとしても、表は薄い藍の緑色を重ねて紫に、裏は紫で朱色の代り

としたり、また、別物の紅色さえも重ねると言うじゃないか。

芸も、そんな偽物で、とつて替えようとしなかつたよ。そんなことをし

ても、端午の季節に女、子供が着るような麻布あさのの単衣ひとえのようなものさ。

五つ紋の礼装を着るような芸であるからは、

陰日向なく言動を慎みなさい。

人の喝采が熱いと言つては入道雲のようにむむくむくと増長し、

その雲が散つて、人氣が無くなつてしまつたら、

遠くに見える筑波山の夕暮れの暗い山木のようにガツカリして、

それまでの染浴衣を脱いでしまつて、

次、どの染浴衣に着替えようかつてことではだめだよ。

ま、染めと言つてもアンティーク調の花鳥模様は吉長染め、

京都女院の御所染め、中村千弥の千弥染め、乱れ模様の忍摺り染め、

伊藤小太夫の鹿の子絞り、模様染めの友禅と、

いろいろ流儀はあるけどね。

屋形船に掛けた人目隠しの青竹の簾すだれの向こうは、ぼんやり見えるけど、

川風が入つて肌にやさしいなあ。じゃらじゃらじゃらとしていたら、

枕の紙は、お前の汗に濡れてしまつたつてわけよ。お前さんの

鬢びんのほつれを直そうつたつて、おれの簪かんざしの先じゃ届かないつてば。

お互いに届かぬ愚痴があるつてことは、惚れた同士つてことさ。

だから「主さん命」と腕に入れ墨を掘り切つてるんだぜ。

堀切の花菖蒲あやめで、水も、おれの心も、色づいているつてわけさ。

水は引く弾く、三味線の糸柳。俺たち、糸がもつれちゃつてギクシヤクシ

てきたけど、もう一度、盃かわを交して縁を結び直そうよ。

この先、末広がりにうまく行かが決まる勝負の酒だよ。

菖蒲酒は邪気を払う百薬の長と言うじゃないか。

さあ、何杯だつて盃を巡らして、とことん飲もうよ。

酒は泉のごとく尽きないように、芳村伊三郎さんもまた、尽きはしない。

芳村の家は栄えるよ。本当におめでどう。

補注

応時、唄方の芳村伊十郎と三味線方の杵屋勝三郎とが不仲であつたらしく、
一門の杵屋正次郎が心配して仲を取り持つたという。

伊十郎が五代目芳村伊三郎を継いだ改名襲名披露の打ち上げに、二人は隅

田川に船で乗り出し、仲直りをしたという設定で、杵屋勝三郎の言葉とし

て現代語に訳してみた。

平成二十九年七月八日 竹芝乃比呂 拙訳

